

メッセージ

被災地からのメッセージ

全国の皆さまへ

あいコープふくしま副理事長

橋本拓子さん
はしもと たくこ

あいコープふくしまの副理事長・橋本拓子さんに活動の内容や、日々感じていらっしゃるごこと、全国の生協に伝えたいことなどをお聞きしました

●組合員さんの生命と健康を守りたい

「あいコープふくしまでは、2013年5月から独自にホールボディーカウンタ※(WBC)と食品の放射能検査機器を設置され、組合員さんの内部被曝測定や食品の線量検査を続けていらっしやいます。どのような経緯で実施されたのでしょうか。」

WBCの導入は、スムーズに決まったわけではありません。発災直後の混乱を経て、組合員さんと理事、職員、生産者さんたちとい

ろいろな議論を重ねた結果です。

発災直後は大混乱でした。これからどうしたらいいのか分からず、みんなが泣いていました。連日のマスコミの報道もひどいもので、「福島では1年後には誰も生きていないのでは?」という印象すら受けました。今までの当たり前前の生活が当たり前でもなくなり、とにかく不安でしたが、時間がたつにつれて不安が怒りに変わっていききました。

そうした中でも、話し合いを繰り返して方向性を探り続けていきました。双葉町で4年にわたって反原発運動に携わっておられる方のお話を伺ったり、学習することで、少しずつ方向性が見えてきました。

あいコープふくしまでは、元々、添加物や化学物質、遺伝子組み替え農産物、農薬、合成洗剤などを避けることを、生協として今まで実践していたので、放射能の問題のことも、同じように考え、取り組みを続けていけばいいという確信も持てるようになりました。

震災前から提携していた生産者は、除染や放射性物質を作物に移行させないことに力を入れ、結果、1ベクレル以下の生産物を生産するまでになりました。そんなことから、きちんと検査している福島の食品はとも安全だと思えます。

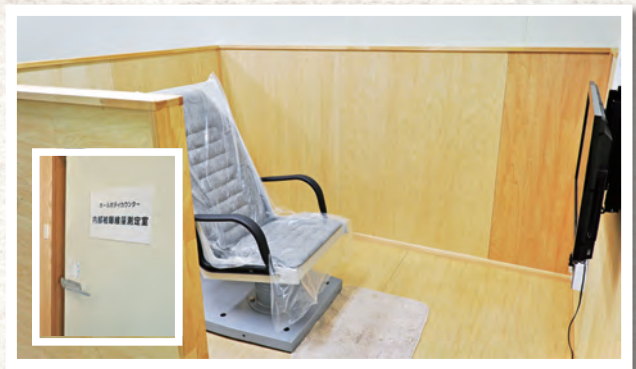
WBCや検査機の導入については、意見が分かれたのも事実です。「生協は食べ物を売ればいいのでは?」とか「今さら測っても……」という声も出しましたが、生協は食材の単なるお届け屋ではなく、組合員の生命と健康を守るのが使命であることを理解してもらいました。

●定期的な測定・交流が不安を取り除く

——導入してみて、いかがですか?

——測定以外に、不安を取り除くための活動をされていますか？

いろいろなことが分かってきましたね。機械は精度が高く、その日の朝にベクレル値の高い物を食べたから、仮に内部被ばくを示す数値が出たとして、その原因が分かりません。WBCの測定時間はわずか5分間で、結果はすぐに出ます。



ホールボディカウンター検査室の様子。左下は入り口の写真。椅子に5分間座り、計測を行なう。

——放射能の知識や測定値の見方、放射能対策、免疫力向上などをまとめた『あいコープふくしま健康手帳』この子の未来のため



測定後、お茶を飲みながら交流できる部屋。

WBCや食品検査器は、あいコープふくしま本部の2階に設置されているのですが、その隣の場所に、みんなで交流できる部屋を作りました。測定も大事ですが、測定が終わったあと、お茶を飲みながら、今不安に思っていることを共有したりし、共感し合ったりする時間がとても大切だと思っています。

に』も発行されています。

はい。『母子手帳』をイメージして、きちんと使えて根拠のあるデータを載せたものにしました。福島では、今でも子どもをどうやって生むか、育てるか、みんなが不安を抱えています。福島で暮らしたことを、将来の人生でハンデにさせないためにも『健康証明書』になればと考えています。

また、週ごとに発行している機関紙「ひまわり」にも、同じように、福島で暮らし続けるために必



あいコープふくしまは、支援生協との交流会も積極的に開催。写真は、常総生協との交流会(13年9月4日、郡山市)。

要な情報を掲載していて、それを読んでいる組合員さんから『ひまわり』が私の生活の支えでした』とお話いただいたことは印象に残っています。

——残念ながら、原発事故の収束にはまだ時間がかかりそうです。

そうですね。すべてのことが初めてづくしで、試行錯誤でやってまいりましたが、まだしばらくの間は頑張らなくてはなりません。

原発事故に巻き込まれたのはショックでしたが、全国の皆さんからの支援、組合員や生産者との話し合い・交流の経験もたくさんできました。一人ひとりの心に寄り添ってまいります。

※ 体内の放射性セシウムのおよその量を測定する機器。

(取材日 2013年8月29日)